石櫻新聞

発行所
盛岡市長田町
岩手高等学校
岩手中学校
出版委員会
責任者　中村重夫
印刷所　山口活版

社史 年史 単行本 機関紙
社内報 ハウスオーガン カタログ パンフレット チラシ ダイレクトメール ポスター 新聞 各種チケット

山口活版
盛岡市内丸17の46（23）1225

昭和44年度 後期石桜会役員

吉田

村上

前関

高橋

菊池

◎執行委員会
会長　吉田豊
副会長　村上修
前関邦明
書記　高橋昭男
菊地宏一
会計　庄司裕
村山謙一
執行委員　高橋義人
菊地弘文
沢田安夫
宇部俊士
中村重夫
武蔵茂夫
藤原和彦

◎常任委員会
○生活委員会
委員長　高橋一善
副委員長　米田晴夫
青松光久
○学習委員会
委員長　沢田安夫
副委員長　南黒沢智
小畑耕一郎
○出版委員会
委員長　中村重夫
副委員長　土井尻誠一
松本工
○図書委員会
委員長　宇部俊士
副委員長　今村健二
長谷川裕作
○放送委員会
委員長　桃井則行
副委員長　藤田清明
小豆島正典
○文化委員会
委員長　高橋義人
副委員長　佐々木豊
室岡信昭
○体育委員会
委員長　菊地弘文
副委員長　平賀満夫
河辺明彦

※★※　※★※　※★※

会長に再選されて

二D　吉田豊

まず、再度会長となってしなかったといえてくるのです。ただ、二年生からも立候補できるということは、期待していいと思うのです。特に三年生の負担を少なくして、大学受験へよりいっそう力を入れるようになったことは、喜ばしきことです。

五月十八日は、運動会。前日雨が降ってやや絶望的であったが、当日は晴天で地面もてごろで楽しい日となる。

五月二十四日は、予算委員会。色々と審議して、まずは内定する。昨年混乱した文化部と運動部の予算の比率を一対六に定めると、混乱が平定した。二十六日に生徒総会を開いて、すんなりと承認を得る。その時、遠征費の不足の時徴集するこのが最手山登山。三年生がこの日だけは大学受験を忘れて山登りに精を出す。中実力考査の前に、県体がひかえているため、当然県体の方に力をそそぎすぎて、実力考査のための時間をとることが困難となるのではないか。せめて、県体がもっと早ければ良い、そんな風に思った。県体の成績をみると、好成績であるが、実力考査の方は、良いとは

私は皆さんにお礼を申しのべます。再びなったからには、一生懸命に仕事に励みたいと思います。

しかし、はっきり言ってこの学校をよりいっそう発展させる自信はございません。ただ、長髪になった時の条件「生徒が乱れてきた時、再び短髪となりうる」を守り、この条件を使わない様に、よりよい方向に向けていきたいと思い、生徒諸君の協力をお願いします。また、校長先生が入学時におっしゃった「三時間勉強法」をみんなに浸透させたいと思います。そのためにも、生徒諸君の協力を必要とするものです。

さて、前期の出来事をふりかえりますと、四月九日より昭和四十四年度の前期が始まった。今年から長髪となって、みんな装いを新たにして、勉強に力を入れる。

四月二十五日は、前期生徒会役員選挙。今年も立候補が少ない上に、生徒の選挙に対する関心も少なく、さらには私の未熟さも加はって、生徒会はあまり向上毎年〳〵集められることは考えたいものである。よって、来年から、何らかの対策をとることに、代議員会で決定。

六月に入り、高体連が始まる。各部共、今迄の練習の成果を十分発揮して好成績をあげる。

六月十七日〜二十一日まで中間考査。元来中間考査というものは、最初の考査であるから、範囲もせまく、点も取りやすいものである。私もそう思って、みんなよい成績だろうと期待したところ、あんのじようであった。

校内体育祭が始まる。放課後テニスコート、校庭、道場及び講堂で熱戦が繰り広げられる。

七月に入り、最初にある動部に入っている者は可哀相な気もする。というのは実力考査の前に、県体がひかえているため、当然県体の方に力をそそぎすぎて、実力考査のための時間をとることが困難となるのではないか。せめて、県体がもっと早ければ良い、そんな風に思った。県体の成績をみると、好成績であるが、実力考査の方は、良いとはいえない。これは、その証拠といえるかもしれない。

七月二十一日から夏季休暇となる。休暇は一ケ月と短い気もしたが、あまり休みが続くと休みボケが生じるおそれがあるので、ちようどいいのではないかという声もきく。

八月二十日、夏季休暇が終わる。その頃、県体があり、それからすぐ二十七日には実力考査がある。私としての意見ではあるが、運こともを承認する。その時、この日だけは大学受験を忘れて山登りに精を出す。中実力考査の前に、県体がひかえているため、当然県体の方に力をそそぎすぎて、実力考査のための時間をとることが困難となるのではないか。せめて、県体がもっと早ければ良い、そんな風に思った。県体の成績をみると、好成績であるが、実力考査の方は、良いとは

こうして前期の行事は終わりをつげて後期へと移った。

後期に入り、まず大きな行事は文化祭である。七月頃に決めたテーマや日時のことを本格的に実行して、二十五日・二十六日に文化祭をむかえた。観覧者は今迄より増して、第一日に八百人を越えて、上履及びプログラムが間に合わなくなる始末、うれしいひめいとはこの事か。第二日目もけっこうきてたいへんなにぎわいであった。

二十七日から長崎国体が始まる。来年は我々の県で行なう。そのためにも、この国体は非常に参考になったといえよう。

後期生徒会役員選挙が行なわれる。この選挙によりはからずもこの私が会長となる。こうして前期・後期と会長をする私であるが、あまりめだった成果は見あたらない。しかし、無事に今迄きたのは、諸君のおかげであると思う。まだこれからだが、どしどし意見をのべて協力してほしい。

村上昭夫さんについて

Ⅲ C　中村重夫

村上昭夫さんが亡くなられてから二・三週間も経ったころでしたか、山田君と僕が学校の文化祭で故村上さんを偲んでの記念展示を引き受けることになり、長い療養生活に耐えておられた西病棟の病室には入れてもらうことはできませんでしたけれど、庭から病室の窓や壁などは写させていただきました。療養所に着いた時は夕方だったので、岩手山は遠くかすんで見えませんでしたが、日の沈むあたりの山々は薄黒くなって、それがその上にある個性の強いそれぞれの雲と対比し、山波だけはくっきり光ってなにか神秘的な美しさを感じさせられました。院内もちようど文化祭らしく、きれいな菊のはち植えが廊下の両端にいっぱい並べられてありました。人の話しで、西病棟の患者はいつも〝生〟と〝死〟が同居しているのだ、というようなことを聞いたことがありますが、そんなふんい気は少しも感じられませんでした。しかし、せつなせつなに村上さんを襲う〝死へ〟という暗く悲しいできごとへの不安は、やはりあったのだろうと思います。もちろん僕たちのように一応平和で安定した生活をしている者にはとうてい理解しきれないものでしょうが、人の話しなど聞いてだいたいの想像はすることができますが

そんな生活の中で、村上さんにとってほんとうにたよれるものは、いったいなんだったのでしょうか。村上さんは次のように言っています。〝私の場合ですと、やはり今までどうり「死」という暗く悲しく、つらい色をした、もっとも強度な眼鏡をかけなおして、ふたたび耐えがたい旅に出るよりほかならない。〟（晩翠賞受賞の記――より）村上さんが詩を書こうとした動機は、宮沢賢治の童話を読んだのが最初なそうですが、その背景としてやはり〝さみしさをまぎらわしたいという気持があったのだろう〟ということを村上さんのお父さんが話しておられました。参考に、宮沢賢治の詩をふたつ引用します。

たよりになるのは
くらかけつづきの雪ばかり
野はらもはやしも
ぼしゃぼしゃしたり黒んだりして
すこしもあてにならないので
まことにあんな酵母のふうの
臘ろなふぶきではありますが
ほのかなのぞみを送るのは
くらかけ山の雪ばかりです（春と修羅　第一集）

業の花びら（作品第三一四番）

夜の湿気と風がさびしく
いりまじり
松ややなぎの林はくろく
そらには暗い業の花びら
がいっぱいで
わたくしは神々の名を録
したことから
はげしく寒くふるえてゐる（春と修羅　第二集）

前者は「たよりになるもの」や「あてになるもの」を模索し、後者は信仰上の疑問、つまり真の仏の世界というようなものの追求を主題としているようです。この詩と合わせて山中校長先生への村上さんからの書簡を書きくわえておきます。

〝――できるなら好きなマンガでも読んでゆっくり休みたいと思いましたが、このようでもうそのひまもなくなって参りました。あと二・三年は追いまわされるとかくごしております。何時までもあほう顔をしてもおれなくなって参りました。それに今度は第二詩集をどうしても出さなければなりません。宮沢賢治との、まことに「業の花びら」です。今度はもう全力をつくします。ただ賢治のような最後はとげないつもりです。〟（抜粋――43・3・29）

村上さんの「動物哀歌」は大体において宗教的な作品が多いのですが、とくに「神」や「去って行く仏陀」などで直接主題としてとりあげられているようです。ただ、〝何か信仰といいますか、特別のよりどころみたいなものをお持ちですかという問に、〝別にそういうものを持ってはいません。ただ、絶対的ななにかを得たいと思っているところです。――43・1・10――故里の町にて、より〟と答えておられるので、一概に宗教的といってよいか疑問です。むしろ村上さんの世界観・宇宙観として考えるべきものだろうというふうに思います。しかし大坪孝二さんの「村上昭夫覚書」（石桜64参照）において指摘されたように〝彼の持っている人間観・世界観が彼独自のものばかりでない〟ことを、〝仏陀やキリストたちの教えを説く彼の中にはほんとうに仏陀やキリストが住んでいたかどうか〟ということを僕も疑問に思います。

また、この「動物哀歌」には詩の背景の設定として〝山〟とか〝丘〟などを用いているものがかなりあります。これはさきの書簡の中の「又ひとつ丘をこえました。しかし今度の丘はとんでもない丘でした……今度、登る時はヒマラヤ山脈でも越えて見ようかなどと、とんでもない夢を見ています。」（43・4・10）や「もう丘ではなくなって参りました。けれど、どんな山が待っていようと新しい戦いを始めざるを得なくなりました。」34・4・14）などの文章と同様に、村上さんの詩の表現方法、形態のひとつだったようです。

村野四郎さんが「動物哀歌」の序において、実の世界とか無の世界とかの観点から村上さんの詩を評価しておられますが、僕のような詩をわからない者は、どう評価してよいのかわかりません。けれども、たしかに〝破壊力をもつ詩〟と〝造型的な文学〟は僕に〝おそろしいほど新鮮な衝撃〟をあたえたようでした。

ぜひ読んでほしいと思う作品は「雁の声」「ねずみ」「豚」「黒いこおろぎ」「紅の両端」「兄弟」「秋田街道」「柄」などです。その中で特に、「ねずみ」の最後三行は今の僕にとって、すでに金言となっています。

ねずみ（裏へ続く）

昭和44年度 文化祭

書道部

校門

観覧者が校内に入ってまず通るのは書道展示教室です。そういった意味で最初に目のつくところですから私たちは一生懸命やってきました。

長年を通じて比較的変化が少ないのが書道展示室です。ややもすると、昨年とまったく同じという形になってしまいがちです。そこで今年は計画中「創作」というものをおいて、手本とは離れた、自分の思うままに作ったものを置いてみました。一年・二年・三年を通じて各人一品参加としましたが、参加は三年だけになってしまいました。

毎年、アンケートを募集していますが、昨年は説明者がいない、作品に変化がないなどでしたが、今年は後者の「作品」に変化がないというのが少なくなりました。前者の「説明者がいない」というのは、今年は積極的にと思って実行しました。そして文化祭がおわって、反省会を開いた時、書道には説明者はいらないのではないかと思うようになりました。「読み」などは聞かれたら答えるとよいのです。

そういった意味で表面だけを積極的に働きかけて、一つ一つの作品を自分なりに鑑賞するふんいきを作るのに欠けているのではないかということです。

全体を通して三年が積極的でした。ということは、二年が積極さに欠けているということです。もっとみんなで協力しあう必要があります。来年は今年少なかった創作をもっと多く展示したいと思います。また全員で一つの作品を作るなどと観覧者から要望がありましたが、それも考えています。

どっちにしろ、昨年よりも今年、今年よりも来年と一つ一つ改善したいと思っています。

書道部展示

社研部

今年の文化祭をふりかえってみて、これにつて、例年になく大成功だったと思う。展示内容の面でも特に充実していた全体の感想として三つに分けて書きたいと思う。

まず第一の感想としてよくがんばったことである。どの部もそうであろうが、やはり我部が一番であろう。なんといっても部員（二年生）三人だけで文化祭の準備をしたことである。準備といっても我部では他の部とちがって、非常に日数がかかることである。あらゆる方面を研究し、調べ、まとめ、部員の意見をまとめることなどである。しかしそれだけではない。作成したレポートを模造紙に書かなくてはならないのである。書くと言っても六、七〇枚書くのである。まさに大労働である。その大労働を三人でやりとげたのである。まさに〝少数精鋭主義〟にのっとる石桜魂である。

第二の感想として、展示内容が充実していて、昨年に続いて我部〝大好評〟だったことである。今年のテーマとして主として五つの部門に分けた。第一として昨年に続いて「続高校生とマスコミ」の―その二―としてコマーシャルについて研究発表した。これでいては高校生がやはり興味を示した。特に女学生が興味を示し、部員も「うれしそうに」説明した。また、模造紙にはりつけたコマーシャルの写真とコマーシャルのテープを流したのも効果満点であった。

第二のテーマとして、「世代のちがい」を研究発表した。これは主に一般から好評だった。高校生と四、五〇代とのいろいろな面からの「世代」のちがいを研究発表したわけだが、一般の人と接し話し合ったことも貴重な体験であった。

第三のテーマとして、「学歴偏重」を研究発表した。このテーマは女学生が対象であったせいか、女学生が興味を示したが、「結婚」に関することなので真面目に見ている男子学生もいた。いろいろな女学生と話し合ったが、女の「真の心？」がわかったような気がした。また、相手との意見が合わず興奮していた部員もいた。

最後のテーマとして、「基地公害」を研究発表した。これが落語で言うと「真打ち」である。「七〇年安保」をひかえて多くの問題があげられるが昨年より一歩突込んで研究した。ついて部員も説明するのに熱が入った。でも素通りが多かったのが残念だった。つまらないと言えばそれまでだが、同じ高校生としてもっと話し合いたかった。また高校生の政治活動についても話し合いたかった。でも多くの高校生が非常に興味を持っていたことは、我部として意義のあるテーマであった。「日本の基地」の模型が大好評であり、抜群であった。

けとめの感想として部員数が足りないことであった土曜日はてんてこまいだった。でも一年の部員がひとりもいなくては話しにならない。来年の文化祭は、二年生が主体であるので、今の二年生はもう見る方にまわるはずだが、我部ではそうもいきそうもない。いかにせよ、来年は一年生を入部させ、来年の文化祭を今年以上によりよくし、成功させ、高校生活のよき思い出の一ページにしたい。

写真部

どのクラブの活動でもそうであると思うが、写真部の活動というのは文化祭の直前にいくら枚数を多く撮っても気にいった写真はなかなかとれるものではない。普段の撮影や研究が非常に大切なのである。その点、今年の文化祭は部員がよくがんばってくれたこともあって写真点数に関しては余裕たっぷりであった。しかし技術的にまだ未熟な二年生中心であった事と計画の甘さから最初の計画とはかなりちがってきたことは、かくす事のできない事実であった。それは近年文化祭のあり方について問題があげられマンネリ化が叫ばれているが、文化祭においての写真部もその例にもれず伸び悩みの状態なのである。なんとか今年こそは新しい趣行で文化祭をといことで毎日のように教室を借りてミーティングをくりかえした。その結果個人だけの写真でなく写真部員全体で一つの課題にとりくむ協同制作の写真があげられた。しかしこれが決定されたのは、半年前題材の難かしさも手伝ってどうしても計画どうりにはいかなかったのである。

また年々写真技術の進歩とともなって、写真が以前にもまして大きく引き伸ばされ、カラーに変わっていく傾向にある。技術的にはある程度自信のあるわれわれであるが、暗室のせまさ設備の不十分からできなかったことは、これからいっそう努力しなければならないところである。しかし写真展示数が昨年より約二〇点も大幅にうわまったことはうれしいことである。研究発表では今年初めてカラースライドと新しい影写の仕方を使っての暗室作業の説明、従来暗室作業はじかに暗写に入ってもらうか図解して説明する方法しかされていなかったのでこのスライドを使っての研究発表はなかなか好評であった。

文化祭当日は、説明員の設置、研究発表、BGMにたいへんいそがしい二日間であった。しかし教室を回る順序がはっきりしていなかったことから写真を多くの人に見てもらえなかったことはまことに残念な事の一つであった。第二日目終了後の部員全員の反省会ではたいへん疲れているにもめげず、今年の悪かった点来年の豊富な建設的な意見がたくさんでて二時間余の時間が短かく、感じられるほどであった。

最後に、上げる事は最初にたてた計画を実行できなかったことと、写真その物が例年と同様あまり変わりばえしなかった事からマンネリという言葉を完全に吹きとばすことができなかった。これが今年の反省でもあり来年への課題であると思う。

絵画部展示

映画部

今までの映画部は、文化祭の時以外は、各映画館からの前売券を売るくらいのことでした。それゆえ、今までの文化祭はマンネリ化してあまり良い成績は上げられませんでした。

しかし、今年はそれを打ち破ろうとして、文化祭で自分たちで撮ったものを写そうではないか、ということになり撮影に入りましたここまでは良かったのですが、ここからガタガタとくずれてしまったのです。

放課後のクラブ活動をさぼるものがあったりして、計画通りゆかなかったのが第一に反省する点だったと思います。それでも、文化祭には、やっとのことで間に合わせました。

次に反省することは、展示しているものを説明する部員が無断でどこかに蒸発してしまい、見物人が来ても説明する部員がいなくてこまったことでした。これは、部長をはじめ上級生の部員も多少の責任はあるのではないかと思いました。

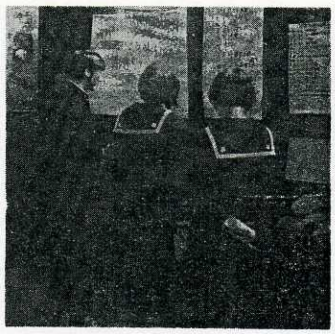
以上のことが、反省の中に入ると思いますが、このことを機会にもっと成長し、且つ積極的に行動してゆきたいと思っています。

生物部

生物部では、部員を二人位ずつに分け、四月から生物実験を行ない、それをレポートにまとめて、スクラップブックにはりつけて、文化祭には、スクラップから良い物を選んで展示しようと思った。しかし、生物の実験がなかなかはかどらずに、良い物を選ぶ余裕がなくなった。

文化祭では、今後の生物部が一層向上するためにアンケートの内容は、展示内容・展示の仕方・説明の仕方・などである。展示内容は実験の項目に○印をつけさせるようにした。文化祭に展示した実験では、色彩と識別が好評であった。展示の仕方は大体よかったが、実験の見出しが目立たなかったという意見があった。また、説明の仕方については二人ずつに分けたので、説明をきけなかった人もいたので、来年は部が一つのテーマをもちたいと思う。

それから、文化祭に展示を予定していた発光細菌の培養に失敗したのが残念であった。


ケイビングクラブ展示

ねずみを苦しめてごらん
そのために世界の半分は
苦しむ

ねずみに血を吐かしてごらん
そのために世界の半分は
血は吐く

そのようにして
一切のいきものをいじめてごらん
そのために
世界はふたつにさける

ふたつにさける世界のために
私はせめて億年のちの人々に向って話そう
ねずみは苦しむものだと
ねずみは血をはくものなのだと

一匹のねずみが愛されない限り
世界の半分は
愛されないのだと

《動物哀歌Ⅰ》

村上さんの、まさに〝闘病〟生活の中から生まれた詩のひとつひとつが、〝無限の寂寥と悲哀〟をこめて結晶されたのです。

しかし、村上さんは「動物哀歌」が装を新たに思潮社から刊行される日を待たないで永眠され、結極この詩集が第一詩集にして遺著となってしまったのです。

村上さんはさきの書簡中でしょっちゅう、「――どうかどうか岩高を立派な学校にして下さい。私もがんばります。」（43・4・10）「――願はくは岩中の名をけがしたくない思いでいっぱいです。」（34・4・14）と、岩中・岩高のことを心配しておられたようでした。

今、考えてみれば、石桜精神とかいうもの、つまり〝がんばるということ〟は村上さんのようにがんばることではなかったか、と思います。やはり社会に出て見ないとほんとうの意味は、なかなかわからないと思うのです。引用文が多くなりましたが、とにかく村上昭夫さんの詩を読んでみてください。かならずなにか感じるものがあると思います